

以上の7段階に分けた。就職先は本学および他大学の助手および大学院、開業歯科医、他の4群とした。このデータを分析した結果、興味ある知見が得られたので報告した。分析にあたり、データカード作成者と分析者は別人とした。

【結果】

1. 平成18年から24年度までに本学で臨床研修を終了した歯科医師は307人であった。

2. 平成18・19年度は24歳の研修医が本学に多く就職していた。

3. 平成20・21年度は24歳の研修医が開業医に就職する傾向がみられる様になった。

4. 平成22年度は東日本大震災の影響で修了時における就職未定者が多くみられた。

5. 平成23・24年度は24歳の研修医が減少し、25歳以上の研修医が多い傾向となり、開業医への就職率も増加した。

9) The Interaction between *Fusobacterium nucleatum* and Erythrocyte Impacts on the Host Innate Immune System.

○米田 早織

(奥羽大・歯・口腔細菌学)

*Fusobacterium nucleatum*は偏性嫌気性グラム陰性桿菌でヒトの常在菌である。主に口腔や大腸等に存在する日和見菌で、歯周病関連菌と考えられている。この*F. nucleatum*の興味深い特徴として、上皮細胞、血球、細菌など多くの原核及び真核細胞と非特異的に凝集する事が知られている。しかし、凝集が*F. nucleatum*に与える影響は知られていない。今回、我々は感染炎症進行時の指標の一つである出血(赤血球)と*F. nucleatum*の凝集に着目しその影響を検討した。

予備実験において、我々は赤血球と共凝集時、*F. nucleatum*の形態が変化する事を確認した。次に、我々はDNA-マイクロアレイ解析を用いて赤血球と*F. nucleatum*共凝集後の遺伝子発現変化を網羅的に分析した結果、10遺伝子の変化を確認した。これら10遺伝子の発現をReal-Time PCR法にて再度確認したところ、赤血球と共凝集した*F. nucleatum*は、共凝集していない*F. nucleatum*に比べFN1472(シアル酸結合タンパク質)の発

現が5倍以上高かった。シアル酸は動物細胞が表層に持つ糖質で、細菌やウイルスはシアル酸結合タンパク質を介して細胞表層と付着する。また数種類の細菌が動物細胞表層のシアル酸と結合し、マクロファージの貪食から回避することが過去の報告よりわかっている。そこで、我々はコントロール(*F. nucleatum*のみ感染)群 n=3、対照(赤血球凝集後の*F. nucleatum*感染)群 n=3をそれぞれWax Wormに感染を行う事により、共凝集の初期免疫経路への影響を検討した。結果、対照群のWax Wormはコントロール群と比較して全て強い炎症反応がみられた。

以上の結果から、*F. nucleatum*は赤血球と凝集することによって、遺伝子発現が変化し、その結果、宿主の初期免疫経路を回避する可能性が示唆された。この現象は、歯周病進行時に増加する*F. nucleatum*の生存策略を表しているのかもしれない。

10) 当科における口腔悪性腫瘍症例に対する構音評価に関する臨床的検討

○吉開 義弘, 宮島 久, 竹内 聡史, 御代田 駿

吉田 綾子, 菊地 祐子, 重本 心平

(会津中央病院・歯科口腔外科)

【緒言】口腔は構音や摂食などの機能を持つ臓器で、口腔内に出来る病巣は少なからず、これらの機能を障害する。特に口腔がんは、手術をした場合、切除範囲が広がることも多く、腫瘍そのものによる障害も出やすい。近年、これらの障害に対する機能評価のひとつとして構音評価が行われるようになってきた。そこで今回演者らは、まず第1報として、術前評価として構音評価を行った口腔悪性腫瘍症例に対して、部位や大きさなどの関連について検討を行ったので、その概要を報告した。

【対象】平成23年4月から平成25年3月までの2年間に当科で手術を施行した33例の悪性腫瘍患者のうち、術前に言語聴覚士(以下ST)による構音機能評価を施行した患者24例とした。年齢41-83歳、平均69.1歳。男性10名、女性13名。上顎歯肉8例、舌7例、頬粘膜5例、口腔底2例、口蓋2例。T1 10例、T2 10例、T3 3例、T4 1例。